

Luncheon Linguistics, 4 December, 2019

2019（令和元）年12月4日

「Dei fan de Fryske Taalkunde 10 第10回フリジア語学会報告」

発表者：佐田 陸（東京外国語大学大学院博士後期課程）

2019年10月25日、オランダ王国フリースラント州レーワルデンの *Fryske Akademy* にて行われた、*Dei fan de Fryske Taalkunde 10* (第10回フリジア語学会) の報告を行った。*Fryske Akademy* とは、1938年の創設以来、フリースラント州の公用語である西フリジア語（インド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派西ゲルマン語）、およびフリジア人の文化や歴史に関する研究・保存のための活動を行っている機関である。年に2回、機関誌 *It Beaken* を発行している。*Dei fan de Fryske Taalkunde* は2,3年に一度のペースで行われており、今回で10回目となる。今大会では7件の口頭発表が行われ、統語論や音韻論、辞書学、言語事情に関する発表の他、古フリジア語のコーパスのデモンストレーションも含まれていた。

報告においては、口頭発表より2件、*Astrid van Alem* 氏（ライデン大学）“3 puzzles in Frisian agreement” 「フリジア語の一致の3つの謎」と、*Francesco Ventura* 氏（カラブリア方言共同体）“Keatsen: a linguistic oasis” 「Keatsen：言語オアシス」について、やや詳しく紹介した。*van Alem* 氏の発表は、西フリジア語の補文標識 *dat* に伴う2人称単数の一致標識 *-st* に関わる3つの疑問に対して統語的なアプローチで説明を試みるというものであった。*Ventura* 氏の発表は概略次のようなものであった。氏は、西フリジア語の共同体に派遣された際の体験から、特にフリースラントの伝統スポーツである *Keatsen* の場において、西フリジア語のみが使用されている、という事実に着目した。そして、「言語島」へのアンチテーゼとして、この場を「言語オアシス」として位置づけることを提唱した。さらに、少数言語として危機的な状況におかれているギリシャ語カラブリア方言にとっての「言語オアシス」を見出し、他の危機的な少数言語にとっても有用なモデルの構築を提唱したいとも述べていた。